

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和7年10月6日(月)

みんなの居場所

雑感

自分が他人からどう見られているのか？若い頃気になって仕方なかった。自分に自信が持てず卑屈な性格だったこともあり、常周囲からの目を気にしていた。自信が持てるようになるには経験と学びによる自己変革が必要で、それをしてこなかったという後悔が、変革の原動力になっていた。更に、自分を厳しく見つめる目を持てるようになったことは、大きな成長だと自負している。これに早く気が付いていればもっと優れた教師になれたのに…。

自分自身を冷静に客観的に振り返る時間は必要だ。よい良い仕事をするために自分を厳しく振り返りたい。

携帯・スマホが普通に使える時代を憂う

ある新聞の寄稿を紹介します。携帯電話のある今の時代はどのような切なさを感じられないかと、改めて思います。

友人から手紙が届き、新聞の紙面が同封されていた。開いた途端、私は息をのんだ。「旧陸軍〇〇飛行場」の見出しがあった。思い起こせば、もう七〇年近くも前の事。女学校在学中、バレーボール部だった私は、たびたび遠征していた。その練習風景を、いつもたずんでじっと見ている凛々しい士官候補生がいた。先輩の知人かなと思いつつ、いつしか私は彼を意識するようになった。

当時は、男性と目を合わせることも許されぬ時代。もちろん、お互いに名乗りあうことはできなかった。電車の中でドキドキしながら、遠征の日、遠く姿を見ることができるとうれしさが待ち遠しかった。

桜の花の散るある日を最後に彼の姿は見えなくなった。特攻機にのって出撃したのだろうか。私はしきりに気になった。それからしばらく経ったある日、学校から帰宅すると、玄関に慌てて出てきた弟が「今、お姉さんに会いに飛行隊の士官さんが訪ねてきたよ。」今思っても、無我夢中で駅までどうやって走ったか…。ホームに立った時、電車は静かに発車した。車窓の中を目で追いつながら彼を探した。直立不動で敬礼している彼がいた。私の初恋は終わった。

どうして、私の家が分かったのか、七〇年近くの間、なぜともにも忘れられない思い出である。紙面の訓練生の集合写真の中に彼の顔を、大きな天眼鏡で何度も何度も探した。涙が止まらない。多分前も分からぬ人の生死を調べることもできない。七〇年近く、密かに心に温めてきた人、そして、この新聞も心とともに大切に読んでおこう。」

今はスマホが当たり前になり、緊張しながら異性に電話をかけていた時代は遠い昔です。私も青春時代を懐かしく思い出しながら、今は「切なさ」を感じられない時代だと思いましたが、SNS全盛の昨今、子ども達のコミュニケーションの稚拙さ、また、誤った使用で取り返しのつかないことが起きています。何をやるにもSNSありきで、対面による知的な会話はあまり見かけません。私達の世代は、異性に電話を掛けることなく、丁寧な言葉づかいで何度も練習したのですが…。

シリーズ「自分を語る」#40

硬性「ルセットが装飾をわると、もう退院の話が出るようになっていました。この時点でもう1月の終わりでいた。もう2ヶ月と半月入院していたことになりました。退院は3月の初め頃に決まりました。それまでの間、少しでも外での生活に慣れるために、外出許可を取るようになりました。と言っても、午前半日とか午後半日とか短い時間です。でも、この外出は楽しかったですね。病院ではアルコールは禁止ですから、当然我慢するしかありません。でも、外出した時だけは、すっかり飲みました。季節は冬ですが、それでも私はビールが飲みたくて、でも1人で居酒屋やレストランに行くような度胸は無く、結局、鶴屋テニートの地下でビールとスルメを買って、屋上の「フレイミング」(今はありません)のベンチに腰かけて飲みました。空気が冷たいのですが、確実に復帰が近づいているという、安心感に似た感覚を覚える時間でした。

楽しい時間を過ごした後、当時銀座通りにあった紀伊国屋書店を經由して、病院に帰るといつかの、定数でした。少し長い距離を歩くことで、体力も徐々に回復していききました。いよいよ3月、退院を迎えます。

退院当日は、看護師さん達とたくさん見送ってくれました。後になつて思いますが、私結構模範的な患者だったようです。だから見送りが多かったのではないかと推測しています。私は3ヶ月入院していたので、多くの患者さんが退院されるのを見送りました。一つの傾向として、病院の方針に従って、生活ルールを守る人、けがや病気を治すことに一生懸命な人には、お医者さんや看護師さんや理学療法士の先生も、優しいかたように思っています。結果的に見送りの多くなるのでは…。その時の忙しさに思いますが、私は大々的に見送られ「お世話になりました。頑張ります。」という気持ちで退院しました。

退院後は月に2回のリハビリと1回の診察を受けながら、出来るだけ規則正しい生活を送るようにしました。仕事への復帰は、学校には申し訳なかったのですが、我がままを言ってしまう時期からという感じでしたので、復帰までの時間は仕事に必要な知識を蓄えたり、友達の家に泊旅行したり、普段ではできない事をしました。

職場復帰まで約半年、何をしようかと初めは迷いました。退院してから2ヶ月ほどは車の運転も控えるように言われていたので、裏面目主治医の言い分けを守り、リハビリに専念していました。それまでは自宅周辺の散歩や、人の少ない時間帯に車で藤崎宮まで行き、上通下通を歩くことが楽しみなっていました。また、就職してから本格的に取り組み始めた書道については、有る余る時間の中でかなり時間を費やしました。この時期、書道に関して印象深いこととして、中国の「四書五経」のうち「論語」「大学」「中庸」「孟子」、いわゆる「四書」について、半紙に小筆で全てを書き写しました。確か、半紙1000枚ほどだったと思います。更に、その後は宮経にも挑戦しました。初めは「般若心経」でした。意味など考えず、ただ書道の訓練として書きまくりましたね。その他にもお経を書いていましたが、覚えていたのは「般若心経」だけでした。当時は腰をかがって生活していましたので、いわゆる条幅は書く書きませんでした。小筆の練習になったと懐かしく思い出します。(つづ)